

綾戸智恵

なりきり、バウンス。

「映画に出るときは、女優や『思うとるんです。ジャズ歌っているときは、べっぴんや『思うとるんです。コスペルのときは、『世界一のプリーチャーや』と想っています。』の延長で、そこに社会的な責任があるわけやけど。綾戸智恵いうのは、単純で、なりきりの強い女なんですよ。」

譜面から音楽は見えない。

人間のエネルギーは使えば使うほど湧いてくる、不思議やね、とその人は語る。無尽蔵や、ともいう。誰よりもエネルギーを使って、生み出し続けている人がそういうのだからそうなのだと思う。インタビュを通して圧倒的な人間力を体感したひとときは、ライブ後、満充電の心持ちで帰るファンに似ている。溢れでるエネルギーに触れることで、自分のエネルギーに替えることができる。そういう装置もまた人間は備えているようだ。

—ある番組で小学生の頃、カプセルに書いた夢はすでに全部実現しているとおっしゃっていましたか。

「もう、何十年前のことやからね。覚えているのは、アメリカのチップ制のバーに行っ

て、ピアノを弾いて、ワイングラスに1ドルとか10ドルをいっぱい入れてもらって、英語で暮らしたいと…。給料じゃなくてチップつて言つた。アメリカの映画を見たんだろうね。家に帰ると、「ハニー」と呼ぶ人がいて、ハーフを生む。それで、お母さんには家を買ってあげて…そんなことを書いたみたい。」

— それで最初にチップやギヤラを手にしたのは？

「(大阪)万博の時ですから、中一ぐらいだと思いますよ。当時、外国人のバーやレストランが大阪にたくさんできてましてね。そこで、チロロチョコと弾くと、「マンシングのシャツやるわ」とか、「五千円やるわ」とか。プロの人がいるのに、「おねえちゃん、もう一曲弾いてえや」とか言われて、「いけるなあ」と思いましたね。手応えを感じたというか…。」

— その頃はピアノが主で、歌はおまけのよくなものだったとか。

「ピアニストでしたから。ある日、伴奏する相手の歌手が野球かプロレスの選手とどこかに泊まりに行つてしまつたんです。それで、なんかやつてえや」と言われたんですけど、英語の歌詞は〈ペーパー・ムーン〉や〈オータムリープス〉ぐらいしか知らなくて、怪しいところは、「シユビズバ、シヤバダバ」って。15分ぐらい延々歌うていたのを覚えてます。」

— ずっとクラシックを勉強されていたことがついています。

「クラシックのピアニストになるつもりだったんです。でも、先生には手が小さいんでダメだつて。それと勝手に作っちゃうから。譜面を見ないで弾くからね。モーツアルトの何番と言われたら、レコードを買いに行つて、聴いて、弾いてね。譜面は面倒くさくて…。譜面から音楽が見えてこないのですよ。私はモーツアルトみたいな天才じゃない。耳から聴かないとわからないんです。でも、小学校一、二年生の頃はとにかくピアノがうまくなりたくて、カーメン・キヤレロとか、えーと、なんだっけな…ダイヤモンドをいっぱい着けるおじさん…リベラーチエー！ああいう風になりたいなあつて思いましたね。リベラーチエつて、モーツアルトみたいな顔してかくパーツとピアノが弾きたかった。」

— アメリカのクワイア(聖歌隊)での経験が今の綾戸さんに影響しているとおっしゃる方もいます。

「自分では自分のことを切り刻んで見れないでね。もちろんケンカしたらケンカした歌になりますし、日々、いろんなことに影響を受けていることは間違いないです。ただ、ゴスペルという音楽はいいなあと思つています。ずっと昔ね、彦摩呂さんと喧嘩したことあるんですよ。もう年季が明けているからええけどね。彼が司会で、次は綾戸智恵さんとお〇〇クワイア。これはゴスペル風ですよ」と

「それでは自分のことを切り刻んで見れないでね。もちろんケンカしたらケンカした歌になりますし、日々、いろんなことに影響を受けていることは間違いないです。ただ、ゴスペルという音楽はいいなあと思つています。ずっと昔ね、彦摩呂さんと喧嘩したことあるんですよ。もう年季が明けているからええけどね。彼が司会で、次は綾戸智恵さんとお〇〇クワイア。これはゴスペル風ですよ」と言われて、何言ううとんねん！と。私は「〇〇風」は嫌いなんです。音楽をバカにするなとか、偉そうに言うてるんじゃないです。ゴスペルやつてるときは、「ゴスペルや」「思うとるんです。映画に出るときは、女優や」「思うとるんです。ジャズ歌つてるときは、「べっぴんや」

「思うとるんです。ママゴトで、お母さん風やねえ」「言うたら子どもでも怒りますよ。私も「ごっこ」の延長で、そこに社会的な責任があるわけやけど。ゴスペルやるときは、「自分は世界一のプリーチャーや」と思つております。綾戸智恵いうのは、そんな単純な、なりきりの強い女なんですよ。」



「MY WAY」綾戸智恵 meets 原 信夫とシャープス&フラッツ(2010年4月発売) ¥3,000(税込)
09年にファイナルツアーを終了した日本音楽界が誇るビッグバンドとのコラボは話題に。アレンジは6月のグランシップで初共演を果たす前田憲男氏。

「歌を歌う時は、天に向つて斜め上に放つといいと小学生にアドバイスされていたシーンを見たことがあります。」

空っぽになった音楽の箱。

— これまでに忘れられないステージといいますと？

「河口湖で演奏しているとき、友人の森下(滋)がオルガンを間違つて弾いて、「おい、それちゃう！」と目で怒ったことがあるんですよ、そしたら森下が気づいて、すぐ直してくれたんです。そしたら緊張がほぐれたんかして、演奏中、突然三小節ほど眠つて起きたのを覚えているんです。座つたまま、ピアノを弾いてるまま、完璧に寝てたんです。そのとき、「おい、やめて家に帰つたらどうや」って自分が言うんですよ。そしたら「だめだめ、がんばらなきゃ」ってもう一人の自分が耳元で言うんです。その「がんばらなきゃ」という声で起きたんですけど。」

— しばらく音楽活動をお休みされていますが、したが、再開されていかがですか。

「再開せぬ死ぬ、と思うたんです。我慢してがんばるには六カ月ぐらいが限界なんだなうてわかりました。六カ月は母の介護でいっぱいになって、十分母のことが埋まつてきたら、音楽の箱が空っぽになっているのに気がついたんです。言うたらね、お味噌汁ばかり飲んでいたら、横に鯛の塩焼きがあるのを忘れていて、見たら鯛の塩焼きが食べたくなって、しょうが

17歳で初渡米。以来、何度も渡米している。「映画の中のドリス・デイと同じように24時間ジャズ漬けで暮らしたかった。びっくりしたのは、二枚目は俳優だけやということ。不細工もたくさんいるなあと思いました。(笑)」

【あやどちえ】

ジャズシンガー。両親の影響でジャズとハリウッド映画に囲まれて育つ。3才でクラシック・ピアノを始め、教会ではゴスペルを歌い。中学に入るとナイト・クラブでピアノを弾き始め、17才で単身渡米。91年に帰国後は、数々の職業を経て、大阪のジャズ・クラブで歌い始める。98年にCD「For All We Know」で鮮烈デビュー。弾き語りによる3枚目のCD「Life」は発売と同時に大ヒット。2001年、第51回芸術選奨文部科学大臣新人賞(大衆芸能部門)受賞。03年には、紅白歌合戦で「テネシー・ワルツ」を熱唱。芸人顔負けの爆笑トークを交えながら、ジャズ、ポップス、j-popなど幅広いレパートリーを巧みに取り入れた個性的なステージは、多くのファンを魅了している。08年7月、デビュー10周年記念コンサート終了とともに、母親の看護に専念するためコンサート活動を休止し、09年9月、コンサート活動を再開。1957年大阪生まれ。

なくなつて…食べたならうまかったです。」

「再開して変わったな、と思われることはありますか。」

「あまり自分ではわかりません。だから、私、仲良くしてくれているファンの子に、今日、どうやった？ って電話するんです。そうすると、綾戸節っていうのはこういうフレーズだよね。って言われて、ああ、なるわ、自然になるわ。とか思つて。私の鏡はお客さんですから。」

「ファンといえば、村松友視さん、山下洋輔さんをはじめ、この誌面にご登場いただいた方々の中にも熱烈な綾戸ファンが多かったです。ありました。」

「ありがたいですよ。口の付いている人間にいろいろ言うてもろて。私はね、社長に、お前、宣伝費いくら使ってるん」と言うたことがありますよ。ロコミでここまでできましたからね。(笑)」

「六月のグランシップでのライブは、前田憲男さんとの初共演だそうです。ビッグバンドの楽しみとはどんなところにあると思われませんか。」

「(ここでこう来るねん、というのがジャン！と、よう来ますねん。そこが一番のよさかなあ。それもあんなオッサンが仰山一挙についでいうのはゴージャズですよ。(笑)」

「以前、ピシッと揃った新札の百万円の束より、旧札の百万円のほうが好きだとおっしゃってましたが、ビッグバンドのよさと共通するものがありますか。」

「あります、あります。新札だったらペロっとしたもんやけど、シワシワの旧札だったら、

ふわつと大きくあるでしょう。あんまり揃いすぎは嫌いなんです。(カウント)ベーシートの録音なんか、プーとか聞こえてるもんね。あれがええわ。アメリカにおける時は、夜、タダでビッグバンドを聞いてました。小っちゃい

オッサンで、アルトのサクソ奏者で、ベニー・カーターという人がバンドを持っていて、ようタダで演っていたんです。それで歌わせてくれ！ 言うて、上からユニゾンで入ったことがあります。」

「初共演の前田憲男さんについてお聞かせください。」

「大阪のオッサン！ という感じやね。(笑)今回、ニヤツとしてくださったらゲットやろうね。それで、お客さんもゆるんでくれたらオツケーかな。私のライブでは、演奏じゃなくて話だけを聴きに來る人もいはるけど、何でもいいんです。歌の部分、バンドの部分、トークの部分、どっか気に入ってはるんやったら、それでいい。CDが好きや言う人も、コンサートが好きや言う人もいる。皆さんの楽しみ方で、一つの私は何個でもおいしい。グリコのおまけみたいなもんやね。そんなやつたらうれしいです。」

「最後に夢は全部叶えてしまったとおっしゃる綾戸さんの今後についてお聞きしたいのですが。」

「いやあ、それはもう若返りしかないでしょう。こんな頑張つて、来年死んだらアホみたいや。もうちょっと長生きしたいわ。それで八十、九十になつて、若いヤツをアゴで使いたいわあ。(笑)」



6/18 (土) 3月20日(日)発売開始

グランシップ ジャズライブ プレミアム
JAZZ LEGENDS VOL.2

**前田憲男スペシャルビッグバンド
with 綾戸智恵**

17:30開演(17:00開場)

グランシップ 中ホール・大地

全席指定 / 一般 6,000円 学生 1,000円

お得な年間セット券あり。詳しくはP27へ